赤い夜

大野さいころ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤い夜

【Ｎコード】
Ｎ３７０４ＢＡ

【作者名】
大野さいころ

【あらすじ】
魔法があり、魔物がいる世界。
人々は都市を築き、戦うすべがあるものはギルドに入り都市を守り、それ以外のものは都市繁栄のために働くのが常識となった世界。
王族、貴族、平民、商人、奴隷と身分の違いがある世界。そんな世界の、過去にとらわれた一人の青年の物語。

プロローグ（前書き）

閲覧ありがとうございます。

プロローグ

何度思い出したことだろう。
何もできなかった自分を。
命が塵のごとく消えていく光景を。
決して忘れることも、清算することも許されないず
取り返すことも叶わない。
後悔することしかできない過去を。

何度考えたことだろう。
なぜ俺が生きているのかと。
なぜ俺だけ死んでないのかと。

何度欲したことだろう。
金、権力、地位、名誉、女。

そのどれでもなく純粋な力を。
ただただ圧倒的な力を。

何度願ったことだろう。
あの夜が二度と繰り返されないようにと。

プロローグ（後書き）

今回はプロローグなので短いです。

#1　勧誘（前書き）

閲覧ありがとうございます。
ここから物語の始まりです。

#1　勧誘

「ようこそ大都市オルガルドへ！通行証を拝見いたします」

門番にそう言われ青年はガサゴソと荷物の中を探す。

中々見つからず時間だけが過ぎていき、やがて門番も不振な顔になる。

が、やっと見つかった通行証を見せたおかげで門番の顔が戻る。

「グラント・カッシュ様ですね？確認しました。通行証はなるべく取り出しやすい場所に入れておいたほうがいいですよ」

と、門番からの承認と小言を受け取り、荷物をまとめてると再度声をかけられる。

「観光ですか？」

「いや、ここを拠点にあちこち旅してるんでね」

「ギルドには所属しているんですか？」

「フリーで楽しんでるよ」

二言くらい会話して、グラントと呼ばれた男はようやく歩を進める。

久しぶりに帰ってきたこの街は、以前よりも活気だっているようだった。

俺は久々に帰ってきた街を眺める。
なんか以前いた時よりも賑やかになったな～と不思議に思ったが、
ふと目に入った看板を見て納得した。
いつの間にか今年もそんな時期になったのか。

『武闘会』

その名の通り戦って勝者を決める大会。
この大都市オルガルドでは毎年恒例行事として有名だ。
魔法・武術なんでもござれの大会で、興味本位で参加するとひどい目にあうこと間違いなし。
そして参加者もかなり多く、他国からも毎年多くの強者が参加するためにやってくるとか。
実際に、各国の騎士や歴戦のギルド所属者の参加記録もある。
参加人数などおそらく大陸でも屈指の多さになるだろう。
まぁ俺はどうせ今年も参加しないだろうから関係ないけど。
ちょっとは興味もあるし優勝商品の１０金貨は魅力的だが、どうにもやる気が出ないしめんどくさい。
何より、大会唯一といっていいルールの存在で俺の参加はできないのだ。

・武闘会参加者は、『４人』で一組のチームを作ってエントリーすること。

これが唯一といってもいいルールだ。

俺はこれのせいで参加することができない。
…別に友達とか知り合いがいないわけじゃないぞ？
いやホントに！むしろ知り合いとかは多い部類に入るんじゃないだろうかとすら思う。
しかし、その知り合いとかは旅先で寄った街などに多いから毎回武闘会には参加できない。
この街にもいるっちゃいるけどあいつらは戦えないしなぁ…。
何よりあいつらを含めても3人だから結局参加できないし。

（――――――――）

（ん？多分今年も参加しないと思うぞ？）

（――――――――）

（わかったわかった。もし万が一出るようなことがあれば戦ってもらうから）

俺が使役している精霊が話しかけてきた。
念話という方法で、精霊と頭の中で会話できる。
しかしこれは上位の精霊のみしかできずにいるので意外と知らない人間も多い。
まぁそんなことはいいとして、何でも戦いたいから武闘会に出るなら召喚しろと言ってきた。
何でそんな好戦的なんだろうかと嘆きつつ、適当にあしらっておいたので今回は大丈夫だろうと思う。
なんせコイツを人前で召喚すると騒ぎになるからなぁ。

「あ～疲れたっと」

ベンチを見つけたので荷物を降ろし、ガタっと音をたてて座り込む。
門からいつも世話になってる宿まではだいぶ距離があるから小休止だ。
今回もちょっとの期間休憩してから出発しよう。
そう決めて、ここ数年はいつもそうしてるかと苦笑する。
ギルドでも入ってみるかなぁと考えながら空を見上げると、雲一つない青空が広がっている。
まるでこの世に争いごとがないと錯覚させるような、綺麗な空だった。

「平和だなぁ…」

思わず口からこぼれた言葉だった。

私たちは困っていた。
武闘会に参加するために大都市オルガルドまで来たっていうのに、ルールのせいで参加資格が得られない。
なんで3人じゃいけないのよ！？って思うし、実際に受付の女性にも言ってみたが「ルールですから」の一言でねじ伏せられた。
―なんて融通が利かないのかしら！3人でも4人でもそんなに変わらないでしょ！
実際は3人と4人じゃ大きな違いはあるが、

私たち3人でいいところまでいける自信がある。
むしろ一人だけ知らない人間がいても邪魔になるだけだろう。
私はどうしたものかと思い、隣にいる金髪の女の子に話しかけた。

「ねぇシア？どうする？」

「そうですわね…。私たちだけじゃ出場できないですものね」

「なんかいい案ない？」

「やはり誰かに一時的にチームに入って頂くしか…」

やはり私と同じ結論になり、なんかしっくりこない様子のこの女の子はシア。
フルネームはセルシア・セルヴィガー。魔法が得意だが運動神経はあんまりない。
貴族ということもあって言葉遣いが丁寧で、ちょっとだけプライドも高い。
そして容姿も抜群に綺麗で、胸もでかい。…なんかずるくない？
ま、まぁ私もそれなりに容姿に自信あるし（シアほどではない）、胸もそこそこでかいし（シアほどではない）…。

……。

これ以上比べると精神的に病みそうだからやめておこう。
自分の気分を変えるために、シアとは逆隣にいるかわいらしい女の子に話しかける。

「ラビリアはどう？」

「わたしも誰かに入ってもらうしかないかと…」

「そうよねぇ。気はあんまり進まないけど」

「け、けど！怖そうな人はいやです…。」

なんかすでに泣きそうなこの子はラビリア・ジョンストン。
背は小さくてとてもかわいらしい。
性格も恥ずかしがりでまさに女の子っぽさが滲み出てる。
年は私たちよりも２つ下で、まるで妹みたいに思わせる雰囲気がある。
ラビリアも魔法が得意で、主に回復などを専門としている。
彼女の性格にピッタリだと思う。

「ミリーはどうなんですの？」

「私？私も適当に誰か入れるしかないかなぁと思うよ」

「こ、怖くなさそうで、出来たら優しそうな人がいいです…」

「わかってるわかってる」

ラビリアに苦笑しつつ、それしかないよねぇと嘆息する。
シアにミリーと呼ばれた私はミリエール・マックギル。
魔法はあんまり上手ではないけど、剣術なら自信がある。
親しい人にはミリーと呼ばれていて、１年前からこの３人で一緒に旅をしている。
ちなみに大都市オルガルドには今回初めてきて、これからはここを拠点に活動するつもりだ。

「それにしてもねぇ」
「どうしたんですの？」
「うん、どうやって入れる人を探そうかと思ってね」
「そうですわね。例えば暇そうにしていて、ラビリアの要望に叶っていればその人でいいと思いますけど」
「そんな簡単に決めちゃってもいいかな？」
「ええ。最初は3人で参加する予定でしたから、3人で戦えばいいのですわ」
「それもそうね。ラビリアはどう思う？」
「わたしもそれでいいですけど、そんな人中々いなさそうです…」
「確かにそうですわね。けど案外近くにいたりして」
「ないない！そんな簡単に見つかるわけないって」
方針は決まったものの、そんな都合のいい人がすぐ見つかるはずもなく嘆息する。
と、近くからガタっと音がして
「平和だなぁ…」
と気の抜ける声が耳に入り、思わず声が聞こえた方向を見てしまった。

そこには明らかに暇そうで、私たちに年齢も近そうな青年がベンチに座って空を見上げていた。

「いたんじゃない…？」

私がそういうと、2人もコクコクと頷く。
ベンチにもたれかかっているその青年は私たちに気づいてないのか、ずっと空を見上げたまま動かない。
とりあえず暇そうという第一条件はクリアしている。

「ラビリアはどう？あいつでも大丈夫？」

「は、はい。怖くはないです」

「たしかに雰囲気は柔らかいものがありますわね」

ラビリア、シア共に誘うのはあいつでもいいようだ。
かくいう私も特に嫌な点もない。

「とりあえず声かけてみよっか。シアお願いね」

「わたくしですか？」

「うん。よろしくね！」

シアは貴族なので、対人スキルなども高かったりする。
それに見た目もいいので男相手ならばこれ以上の人材はいないだろう。
シアが「わかりましたわ」と言ってくれたので、私たち3人はあの男を誘うべく歩き出した。

ベンチに座ってぼーっとしていたら、少し離れたところに3人の女の子がいるのに気づいた。
パッと見年齢は俺と同じくらいなのに、帯剣している子がいるのを見ると武闘会が目当てだろうと勘付く。
帯剣していない2人からは魔力が感じられる。
魔法を発動していないのにも関わらず微量だが魔力を感じるということは、それなりの強さがあるのだろう。
しかし珍しいなぁ。
武闘会に参加する女性も珍しいが、何よりチーム全員が女性というのが珍しい。
今は3人しか見えないが、きっともう一人も女性なんじゃないか？
などと勝手な推測を1人でしていたら、なぜか3人組がこっちに近づいてきた。
まさか俺に用なんてあるはずもないだろうから、先ほどまでと同じく空を眺めていようとしたら、

「すみません。少し話を聞いてもらってもいいですか？」

と先頭にいた金髪の美人さんに話しかけられた。
完全に不意をつかれたので、咄嗟の言葉がでなかった。
ただただ金髪の美人さんを凝視していたら再度声をかけられたので今度はちゃんと返事をする。

「ああ、ごめんごめん。でも初対面だよね？」

「ええ、そうですわ」

だよねぇ。まったく見覚えないし。

「それで、俺にいったい何の話かな？」

「その前に質問させて頂いてもよろしいですか？」

この子たちは俺に何の用があるのだろうか？
まったく見当もつかない。

「いいよ。何かな？」

「これからしばらくの間お時間空いているでしょうか？」

「ん～それってどれくらいの期間のこと言ってる？」

「一週間程度ですわ」

…なるほど。
これから一週間後っていうとちょうど武闘会が終わるころか。
受付もたしか今日までだったか？
ある程度内容が把握できたが、まだちゃんと3人の話を聞くまでは
確証は持てないか。

「まぁひと月くらいは暇だな。それがどうかしたか？」

俺がそう返事をすると、3人で目配せをして頷いている。

そして俺の予想通りの返答が返ってきた。

「よろしければ、私たちとチームを組んで武闘会に参加して頂けませんか？」

「……」

やっぱりか。

どうしたもんかと困っていると、今度は違う女の子が前に出てきた。

「参加してくれるだけでいいのよ。戦闘は私たちだけで大丈夫だから」

「なるほどね。人数合わせってことでいいのかな？」

「そうよ。だからお願い！もし優勝したら分け前もちゃんとあげるから！」

確かにそれなら俺にも断る理由はないかな？

戦闘しなくてもいいならあいつも召喚しないで済むし。

何より一番小さい女の子がこちらを涙目で見てるのが気になるし。

断ったら泣くんじゃないか？

「あ、あの…お願いします…」

蚊の鳴くような声でお願いされてしまった。

悪い条件でもないし、泣かせたくもないからまぁ参加してみるか。

「あぁ、いいぞ」

「「「え！？」」」

なぜか3人同時に驚かれた。

「誘ってきたのはそっちじゃないか。なんで驚くんだ？」

「え、だってエントリーだけしてもらって戦わなくていいなんて条件、こっちに都合良すぎるからそんな簡単にＯＫ貰えると思わなかったのよ」

「あぁそんなことか。まぁ断るほどの悪条件じゃないし、俺の暇つぶし程度だと思ってくれていいよ」

「そう？ありがと！あ、私はミリエール・マックギル。ミリーって呼んで」

そう名乗った女の子は帯剣している。

剣術が得意なのだろう。華奢な体だが筋肉の付き方を見ると武術もできそうだ。

「わたくしはセルシア・セルヴィガーといいます。シアと呼んでください」

次は最初に話かけてきた金髪の美人さんが自己紹介してくれた。

シアは魔力は高そうだが、武術などはきっとできないだろう。

「わ、わたしはラビリア・ジョンストンです…」

さっきの泣きそうな女の子は消えそうな声で自己紹介してくれた。

この子からも魔力を感じるが攻撃とかできるのだろうか？

しかしこの3人は剣士と魔術師のバランスがいいな。
きっとシアとラビリアのうちどちらかが治癒魔法を使えるのだろう。
まぁ十中八九ラビリアの方だとは思うけど。性格的に。

「俺はグラント・カッシュだ。親しいものはグランと呼ぶな。まぁ呼び方は自由でいいや」

「よろしくね、グラン」

「よろしくお願いしますわ、グラン様」

「よ、よろしくお願いします、グラントさん…／／／」

なぜかラビリアは照れていたが、とりあえずは相手の簡単な情報を掴めたのでそろそろ次の提案をする。

「よろしくな。じゃ、さっそく受付いこうぜ」

俺はさっそく歩き出す。
が、数歩歩いたところで誰かに肩を掴まれた。

「ん？なんだ？」

「受付、あっちなんだけど？」

振り向くとミリーが呆れ顔でそう言った。
ついさっきあった子にそんな顔されるとは、なんかショックだ。

「オルガルドに来るのは初めてなんですの？」

シアにそう聞かれ、これ答えるとまた呆れられそうだなと思ったが正直に答える。

「いや、もう数年ここ拠点にしてるんだけどね…」

「武闘会って、毎年開催されてるのに…」

シアはともかく、ラビリアにも呆れられてる様子。
このままじゃいけないと思い、咄嗟に言い訳を始める。

「だってなぁ…。一回も参加したことなんてなかったし受付の場所なんて知ってるはずないだろ？なにより―」

「はいはい、わかったからいきましょ」

ミリーに遮られ、背中を押される。
なんかあって間もないのに嫌な立ち位置になったなぁ…。
まぁ変に気を遣わなくていいのは助かるけど。
どうせ一週間程度の付き合いだしな。
それなりにうまくやっていこう。
そう思い直して、自分の足で歩を進め始めた。

#2　偶然重なる過去（前書き）

閲覧ありがとうございます。

#2　偶然重なる過去

どうせやることもないだろうと思い、武闘会に参加することになった。
初めて参加するが、なんかもうめんどくさくなってきたな。
受付に行くだけだってのに既に人が多すぎるほどいる。
これ、全員参加者だったら一週間では終わらないんじゃないか？
…勧誘、受けなきゃよかったかな？
既に軽く後悔してるが、まぁ戦わなくて済むならいいか。
受付までまだ距離があるらしいので、道中俺は気になっていたことを聞いてみる。

「そういや女の子3人って珍しいと思うんだが、お前たちはどういう関係なんだ？」

しかも3人ともまだ若いしな。
俺よりも年下か、同い年ってとこか？

「私たちはもともと知り合いでもなんでもないのよ」

「そうなんです。たまたま知りあって一緒に行動するようになったんですわ」

「ふーん…」

なるほどな。
それじゃあそれぞれが親元を離れて旅してる理由があるってことかな。

「どのくらい一緒に行動してるんだ？」

「ちょうど1年くらいよ」

「ほー…」

1年経ってるってことは仲間として相性がいいのかもな。
なんせ下手したら一緒に行動して数日で解散なんてこともざらにあるらしいし。
戦闘での役割や、性格がうまく合わないと一緒にいる意味なんてないしな。
まぁ俺は基本一人だからわかんないけど。

（――――――――）

（大丈夫だ。お前らの事忘れてるわけじゃないよ）

「ちょっとグラン？」

「ん？」

「ん？じゃないわよ。なんか急に黙ったら気になるじゃん」

「ああ、悪いな」

念話をすると外の会話が入ってこないからつい黙ってしまった。
これよく言われるんだよなぁ…。

「話しは戻るけど、聞く限り特別な仲間ってわけじゃないのか？」

「出会いこそたまたまだったけど、今は特別な仲間だと思っているわ」

「私もですわ」

「私もです…。ホントに出会えて良かったです…」

…良い仲間だな。
3人が3人ともお互いに必要としているのがよくわかる。
親友の様な仲の良さがうかがえる。

「親友か…」

「え？」

聞こえない程度に呟いたつもりだったが、どうやらミリーには聞かれたらしい。
あまり突っ込んでほしくない部分なので「なんでもないよ」と返しておいた。

…それにしても親友か。
その単語を聞くたび、思い出すたびに様々な感情がうずめく。
懐かしさ、怒り、悲しみ、嬉しさ、憎しみ、慈しみ…。
あいつらのことを考えれば考えるほど強くなるこれらの感情を俺はいつも持て余している。
そのことを自覚しながらも、どうすればいいのかがいつもわからない。
いつか、わかる日がくるのだろうか？
それすらもわからない。
ただ一つ、一つだけ明確にするべきことは理解している。

俺があいつらにしてやれる、最後の事。
必ず探し出し、必ず殺すこと。
それだけは昔から変わらずわかっている。

「ちょ、ちょっとグラン？」

「あ？ああ、なんだ？」

「また黙ってるんだけど。しかもなんか怖い顔してたし…」

しまったなぁ。ついこいつらがいるのも忘れ考え耽っていたようだ。
ラビリアなんか本気で怯えているようにみえるし。
しかし…そんなに怖いかな、顔…。

「すまんすまん。ちょっと考え事してただけだから気にしないでくれ」

「ならいいけど…。今度はグランの事教えてよ」

「俺の事？」

「少しとはいえ一緒に行動するんだしいいでしょ？それにさっきは私たちの事聞いてきたんだし」

「私も聞きたいですわ」

「わ、わたしもです…」

「そうだな。なんでも聞いてくれ」

とは言ったものの、言えないことの方が多いんだよなぁ…。
まぁ適当に濁せばいいか。

「じゃあ年齢は？」

「１９だ」

「ふーん。私よりも１歳年上なんだー」

「そうなのか？それじゃシアもミリーと同じ１８歳かな？」

「当たりですわ」

「で、ラビリアは１６歳くらいか？」

「す、すごいです…。その通りです…」

適当に言ったんだが当たったようだ。
まぁ大体みんな予想通りの年齢だったな。
唯一年下のラビリアも、なるほど、妹的な立ち位置にいるわけか。

「普段は何をなさっているんですか？」

「特に何も。ここを拠点に旅をしてるくらいかな。適当にどっか行って適当に帰ってくる。そんでひと月くらいしたらまた行くって感じ」

「ギルドには入ってないんですの？」

「それなー。何度か考えたことあるんだがまだ入ってはないんだな」

「なんか随分適当ねー」
一応、勧誘してくる奴もいるんだがどうにもな。
まぁ暇な時一度顔出してみるのもいいかもしれんな。
「け、けどその旅って何か目的とかあるんですか…？」
「それは秘密だ」
「あう…」
これは軽々教えられることじゃないからな。
知ってるやつはそれこそ数人しかいない。
皆、長い付き合いの奴だけだ。
「旅してるってことはそれなりに戦えるの？」
「それも秘密だ」
「魔法はつかえるんですの？」
「秘密だ」
「あの…お金はどうしてるんですか？」
「秘密」
「ちょっと！なんでも聞いてくれってさっき言ったじゃない！！」

「なんでも答えるとは言ってないぞ？」

「確かに言ってませんでしたわ」

「シアも納得しないの！そもそも秘密にする必要もないでしょ？」

嘘を言って適当に納得させてもいいんだが、万が一ばれた時のことを考えると得策じゃない気がするんだよな。

まぁ戦わないって約束だったしばれることはないだろうが。

「まぁ気にすんな。大体知ったとこで特に意味もないだろ？」

「それは…そうだけど。うーなんか納得いかない！」

「あんましカリカリすんなよ。ほら、もう受付見えてきたぞ？」

結構話してたのか、いつの間にか受付前まで来ていた。

それにしても…人多いな。

これ明らかに参加者だよな？

さすが大都市だけあって武闘会の知名度も伊達じゃないってことか。

ラビリアも人の多さに圧倒されてるのか、小動物のように震えている。

「ラビリア、大丈夫か？」

ポンっとラビリアの頭に手を乗せて言ったところ、恥ずかしがってしまった。

非常にかわいらしい。

なんて馬鹿なことを考えてるうちに、俺たちの前のチームが受付を終わったみたいで

「はい次の方どうぞ」と受付の女性に促された。

「参加登録お願いします」

「はい。では代表者の方のサインお願いします」

そんなのが必要なんだな。
この3人のうち、リーダーシップをとってるのは今までの会話からするとミリーだな。
とすると代表者もミリーか？

「グラン、お願いできる？」

と思ったら俺が指名された。
なぜ？

「えーと、なぜ俺？」

「私たち女性だからあんまり公に名前公開されるのはちょっとね」

「いや、どっちにしろ試合になれば紹介されるんじゃないか？」

「そうだけど、代表者ほどじゃないでしょ？」

理由は納得できた。
が、俺もあんまり名前を知られるのは好ましくないんだがなぁ…。
けどまぁ、まさか決勝までいくわけでもないだろうし大丈夫か…？

「…そんぐらいはさせてもらうか」

「ではこちらにサインお願いします」

「これでいいか？」

「はい。グラント・カッシュ様ですね。武闘会頑張ってください」

「どうも」

「こちらがグラント様たちが最初に試合する相手です」

と、一つの名前を見せられたが全く知らない名前だった。
ミリーたちも知らないらしく首をひねっている。
名前だけ一応覚えておくか。

「わかった、ありがとう」

「いえ。それでは武闘会は明後日からです。一試合が終わりすぐに次の試合が始まるためスケジュールが存在しません。なのでできれば闘技場の近くで待機していてください」

「了解、じゃ行くか」

「ご武運をお祈りしています」

受付女性の声を背に受け、俺たちは移動を開始した。

「代表になってくれてありがとう」

「戦わない代表ってのもおかしい話しだけどな」

「ふふっ確かにそうですわね」

「だろ？…さて、俺はそろそろ帰るわ」

今日はもう一緒にいてもやることはないだろうから、
そういって別れようと思ったのだが

「グラン様はどちらで寝泊まりしているのですか？」

と聞かれ、立ち止った。

「知り合いに小さい宿をやってるやつがいてな。そこで世話になってるよ」

「そこ、私たちにも紹介してくれない？」

「お、お願いします…」

そういえば、さっき着いたばっかとか言ってたっけな。

「まぁいいけど。別にたいしていいところでもないぞ？」

「構いませんわ」

「そうか、じゃあついてきてくれ」

そういって先頭を歩き始める。
お互い聞きたいことも聞いたから会話もない。
なんか話した方がいいかどうかを考えていたところ袖を引っ張られる感じがしたので、

誰か確認しようと斜め後ろを振り向き、多少の驚きを受けた。
それがラビリアだったからだ。
俺はラビリアにはここまで一緒にいて、知らない人物、特に男には怯えてる印象を受けていた。
そんな彼女が自ら話しかけてきたのだから、そりゃあ驚きもする。
ちなみにミリーとシアはなにか談笑していて気付いていないみたいだ。

「どうした？」

できるだけ優しい声で聞く。

「あの…間違ってたらごめんなさい…。グラントさんってもしかして…とても強いんじゃないかと思って…」

「……」

これはホントに驚くな。
ラビリアには驚かされてばっかりだ。

「へ、ヘンなこと言ってすいません！」

俺が黙っていたせいか、速攻で謝るラビリア。
それだけでちょっと罪悪感を感じる。

「いや、大丈夫だ。ごめんな」

「こ、こちらこそ…。それで、その…」

「ああ、なんでそう思ったんだ？」

「あの…信じてもらえないかもしれないですけど…私、人のオーラみたいなのが見えるんです。けど…それは、強い人からしか見えないんです…だから、あの…」

やはりか。まぁ見ただけで人の強弱がわかる時点でこの可能性しかなかったわけだが、
それでも十分に驚嘆することをラビリアは言ってのけた。

「やっぱり…信じてもらえないですよね…。前、ミリーさんとシアさんにも言ったんですけど…。気のせいだって言われて…」

「ラビリア、それは気のせいじゃないよ」

「え…？」

「君は紛れもなく人のオーラ、正確には魔力量を視ることが出来ている」

信じられないといった表情で固まるラビリア。
まぁ、こんなことが出来るなんて普通は知らないからな。
知る人ぞ知る、というか出来る人だけ知っているといった知識だし。

「え…あの？グラントさん？」

「ラビリアがオーラと言ってたのは、その人のおよその魔力量だ。
数値化されてるわけじゃないから結構アバウトなんだがな。で、強い人からしか視えないってのもあながち間違ってないよ。魔力量が多い人間は、比例して魔法も強くなる傾向があるからな」

「もしかして…グラントさんも視えるんですか？」

「まぁね。ちなみにこれは頑張ればできるって芸当じゃない。君自身の才能だよ」

「そんなことはっ…！」

「魔法を使える相手に限るけど、それでも戦わずに相手の力量がわかるなんてとんでもない才能だ。誇っていい」

そう、これはある意味反則だ。

なんせ魔法戦で勝てる相手と勝てない相手がおおよそわかるのだから。

勝てる勝負を選べるなんて普通じゃありえない。

「…良かった。私だけ視えてるのかと思って…ホントに不安で…ずっと怖かったです」

「そっか。普通はそうだよな。けどこれからはもう大丈夫だよな？」

「はい！昔、ある事件の後に急に視えるようになって怖くて…だけど、今日からは安心できます！」

「……！！…あ、ああ。それはよかった」

「ありがとうございます！」

今日初めてのラビリアの笑顔がそこにはあった。

が、俺はそのことに気づかず、ただただラビリアが言った台詞に意識の全てを集中していた。

『ある事件の後に急に視えるようになって』

……まさか。

あまりにもあり得ない偶然に声を出しそうになる。

ラビリアのこの経験が俺と同じだったからだ。

俺も最初から視えていたわけじゃない。

ラビリアと同じく、『ある事件』の後に視えるようになった。

それがラビリアと同じことを指しているかはわからないが、決して可能性は低くないだろう。

もう１０年も前におきた、そして今も俺を縛り付けている過去。

今までただの一人も俺以外の生存者がいるということすら聞いたことがなかったんだが…。

ここにきて可能性のある存在が現れるとは…。

予期せぬ出会いに鼓動が高まる。

今すぐ確認したい衝動に駆られ、ラビリアに詰め寄ろうとした時、

ようやくラビリアの花の様な笑顔に気づいた。

長年の不安がなくなり、心からの笑顔だとすぐにわかった。

この笑顔を曇らせるのは本意ではないから、無理やり自分を抑制する。

「それより、このことはあの二人には内緒にしてくれよ？」

「え？なんでですか？」

嬉しさのせいか、いつも以上に流暢に話すラビリア。

「まぁ俺にもいろいろ事情がな。だからあたかも弱い風を装っていたいんだ」

「わかりました…。約束します！」

「ああ、ありがとう」

ポンっと頭に手を乗せると嬉しそうにしてくれる。
さっき、自分を抑えられて良かった。
誰であれ過去に触れられるということは、少なからず悪い事柄をその人に思い出させてしまうものだ。
それは俺が一番よく知っている。
この子には、なんとなくだが悲しい思いはしてほしくなかった。

「さぁ、そろそろつくぞ！」

ラビリアの件は落ち着いてからにしよう。
そう決めて、後ろで談笑している2人にも聞こえるように言うと、俺たちに並ぶように小走りでこっちに来た。

「意外と遠かったわね」

とミリーが呟き、皆でどれが宿だと言わんばかりに周りを見回している。

「あれだ」

と俺が一つの宿を指さし、一斉に視線がそこに向けられる。
少し小さめだが、きれいで洒落た外装の宿だ。
俺はその宿のドアを開き、すこし演技っぽく口にする。

「ようこそ。旅人の宿り木へ！」

#2　偶然重なる過去（後書き）

戦闘は次回からになる予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3704ba/

赤い夜

2012年1月10日02時57分発行